

水稻新品種「南海 131 号」の特性

農業研究センター 高原農業研究所

担当者：田中 幸生

研究のねらい

阿蘇、矢部を中心とする高冷地域では、熟期の近い「コシヒカリ」と「ミネアサヒ」で水稻作付面積のほぼ9割を占めているため、刈り遅れによる品質低下等の問題が発生している。

そこで、熟期(労力)分散、産米品質維持および共同乾燥施設の有効利用を図るため、「日本晴」「ヒノクニオトメ」級の極良食味品種の選定を行った。

研究の成果

1 選定した品種

「南海 131 号」

2 来歴

早生、良食味、安定多収性を目標に、宮崎県総合農業試験場(国の指定試験地)において、強稈、良食味の「西海 199 号」を母、極良食味の「ヒノヒカリ」を父とした組合せから育成された人工交配品種である。

3 品種特性

- (1) 出穂期および成熟期は「日本晴」とほぼ同程度で、「ミネアサヒ」よりは出穂期で3日、成熟期で6日程度遅い早生の晩のうるち種である。
- (2) 稈長は「日本晴」よりやや短く、穂長は同程度、穂数はやや少ない。
- (3) 収量性は「ヒノクニオトメ」、「ミネアサヒ」より高く、「日本晴」と同程度以上である。
- (4) 玄米の千粒重は「ヒノクニオトメ」より重く、「日本晴」よりもやや重い。
- (5) 耐倒伏性は「日本晴」より強く、「ヒノクニオトメ」よりもやや強い。
- (6) 食味は「日本晴」、「ヒノクニオトメ」より明らかに優れ、「コシヒカリ」と同程度の極良食味である。

普及上の留意点

- 1 県内の高冷地早植栽培地帯を中心に、「日本晴」、「ヒノクニオトメ」の全部と「ミネアサヒ」の一部に替えて普及を図る。
- 2 穂いもちにやや弱いので、多肥栽培を避け、適期防除につとめる。
- 3 やや大粒で、粒着がやや密であり、籾数過剰の場合、充実不足や乳白粒の発生により品質が低下しやすいので、多肥栽培や早い穂肥施用を避ける。

表1 生育・収量および特性

系統名 または 品種名	出穂期	成熟期	稈長 cm	穂数 cm	穂数 本 / m ²	倒伏 程度 1~5	穂いもち 1~5	玄米重 kg / a	千粒重 g	品質 1~9
	月・日	月・日								
南海 131 号	8.15	10.8	79	19.1	418	0.5	1.5	65.1	22.8	4.4
日 本 晴	8.16	10.7	83	19.0	468	1.4	1.2	62.5	22.5	4.8
ヒノクニオトメ	8.17	10.9	84	19.2	416	0.8	1.2	62.3	22.5	3.6
ミネアサヒ	8.12	10.2	79	19.3	474	0.3	0.8	58.0	19.8	4.4

注) 高原農業研究所、奨決標肥栽培、平成6~8年の平均値

表2 食味試験総合評価値の対比較

系統名または 品種名	対 例						平均
	1	2	3	4	5	6	
南海 131 号	0.33	0.14	0.46	-0.13	0.47	0.20	0.25
コシヒカリ	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.05	0.01
南海 131 号	-0.11	-0.13	0.47	0.10	0.20		0.11
ミネアサヒ	0.11	-0.04	0.13	0.00	0.20		0.08
南海 131 号	0.47	0.20	0.20				0.29
ヒノクニオトメ	-0.07	0.05	-0.15				-0.06
南海 131 号	0.33						0.33
日 本 晴	-0.25						-0.25

注) 数値は、その試験時の基準品を0とし、+は良い、-は悪いと判断されたことを示す。



写真1 株標本



写真2 籾・玄米標本